

## 心の視線

私は今まで穏やかな性格で病状も回復過程にある患者さんばかりを受け持ってきた。「実習大変だね。応援してるよ。頑張ってるね。」実習が終わりに近づくたび、そう声をかけられてきた。その時も「これからよろしくね」と声をかけられた。80代、末期の大腸癌を患った女性。柔らかい物腰が印象的だったその患者さんは今までの人生のこと、病気のこと、家族のこと、たくさんのことを私に話してくれた。「ここから見えるあの木、もう冬が近いのね。風が吹く度に枯葉を飛ばしているわね」穏やかな、心が落ち着く優しい声で私に笑顔を向けていた。

でも、次の日にはその人はいなかった。

「誰だ！何しに来た！こんな牢屋に閉じ込めてどうするつもりだ！」

せん妄だった。私は今までにそういった症状の患者さんを受け持ったことがなくどうしようもない程酷く動揺した。病室を訪れるたび辛辣な言葉を投げかけられたが、その時私にできることは側で見守ることだけだった。「あんた毎日毎日何しに来てるのさ。こんな牢屋に私を一人にして…」「どこに行ってたのさ。誰もそばにいないんじゃ私は…私は…」苛立ちを表に出しながらも、どこか言葉の節々に寂しさが影を落としていた。

私は拒絶されながらも出来る限り側に寄り添った。何もできない無力感を感じつつも痩せ細った手をさすり、温かいタオルでゆっくりと身体を暖めた。

5日ほど経ただろうか。それまで何度も繰り返していた「牢屋」という言葉は次第に聞かれなくなり、出会った日に交わした話題が見え隠れするようになった。

「あなた、明日も来てくれるの？」だんだんと、その眼は私の姿を捉えるようになった。それからゆっくりと、その患者さんは自分を取り戻していった。

末期の癌に侵され体調は一向にすぐれなかったが徐々に食事が喉を通るようになり、時折いつもの柔らかい笑顔がこぼれるようになった。

「ごめんなさいね。大変だったでしょう…。こんな患者を世話させてしまって。」受け持ち最終日、いつも通りにベッド脇で手をさすっていると潤んだ瞳が私を覗き込んでいた。

「でも、あなたがいてくれて良かったわ。ありがとうね。」

視界がぼやけて足元に落ちた。

『心で相手を見る』短い間だったがその患者さんは大切なことを私に教えてくれた。

病室を後にするとき、差し込んだ夕日が患者さんの姿を眩ませていた。

その出会いは今も私の心に焼き付いている。